

## 講評文

執筆者：大石 将弘

60名近い学生がひとつの公演企画を立てて完遂する。それだけでも十分に大仕事なのに、2020年度はコロナ禍が直撃。世界中の演劇人と同様、彼らもまたこの状況下でどのように演劇の上演が可能かという難題に立ち向かうことになった。様々な制約がある中、自分たちがやりたいことを問い続け、実現を諦めなかった痕跡を、上演からだけではなく、それを取り巻く取り組みからも感じることができた。ロビーに展示された美術や衣裳のプランニングの展示(役によって衣裳デザイナーが異なる取り組み面白い!)や、開場中に流れるラジオ風の座談会、アフタートーク(元気いっぱいの進行と、スタッフ陣のプレゼンがどれも良かった)等、素直に楽しむことができた。

一方、作品世界を貫いている「月の接近により地球が終わるまであと90分間」という一番大きなフィクションにリアリティを感じる時間が、開演からしばらく続く。

90分間という限られた時間で25名の群像を描くために、どうしても出来事や関係性よりも各人物が抱えている事情や想いに、言葉の重心が置かれてしまう。そして、テキストの重力に出演者を含めた舞台全体が引っ張られて、余白や想像の余地を感じにくかった。

しかし終盤、ばらばらの想いを抱えた登場人物たちが、各々の願いを口にしはじめ、唯一共通した「終わりたくない」という想いが描かれる場面以降、シーンはテキストの引力から脱して、急速に世界が立ち上がっていくのを感じた。作品中「まつり」と呼ばれるその現象こそ、作り手がどうしても立ち上げたかったものだろう。

ダンスに満たないような拳動であくせく動き回る人々を眺めながら、曲を生み出していくミュージシャン。ゆっくりと時間をかけて、ワンフレーズずつ確かめながら紡がれる。その風景が、コロナ禍に右往左往する世界の渦中で、「□□・ミーツ・□□」という演劇を生み出そうとする行為に重なる。このシークエンスが素晴らしく、新しく何かが生み出されていく様子を、今まさにこの場で起きているものとして信じられる時間だった。

最後に、演技について。涙役の村上はなさん、ガチャ男役の松永さん、モグラ役の北さんなど、生き生きと演じる姿がとても良かったし、他の出演者にも魅力的な瞬間があった。各々が役柄をどう演じるか、考えを深めていったのだと思う。

「計画する」ことが、これほど求められた1年もなかっただろう。例えば、対面での雑然としたコミュニケーションと異なり、オンラインの会議では自分の考えや言葉を整理して計画的に正しく伝達することが求められる。もちろん、感染症対策も綿密な計画と実践の連続だったと思う。

演じるにおいて、計画や準備が大切である一方、それを手放すことも大切である。緊張感だけの時代には、ますます難しい作業かもしれない。けれど、ぎりぎりの場所に立ちながら、手放して、相手や場や観客に委ねることができる能力も俳優にとって必要だと改めて感じた。出演者のうち、俳優を続けていく彼らが、まだ続くコロナ禍を経た先に、そのことを手放さないでいてくれたらと願う。